土器の色 －着色作業雑感－

岩　本　えり子

土器は一見、同じような色に見えますが、実に様々な色によって構成されています。

整理作業の最終段階は石膏で復元した部分に色を塗る作業です。まわりの色と同じように仕上げるため、よくよく観察すると様々な色が見えてきます。例えば弥生土器では黄土色、褐色をはじめ、橙がかった茶色、茶色の中でも明るい色から暗い色まで等です。また、須恵器の場合も同じです。皆一様に灰色に見えますが、濃淡、明暗微妙な灰色の世界を作り出しています。焼かれて変化した土器の色の中には白、灰、黒、赤、黄、緑、青、紫といった色も見えます。さらに、これらの色は太陽の光や照明の光などによっても変化して見えます。このことが原因かどうかは分かりませんが、実測段階での色調表現は人それぞれの個性がありおもしろいものです。色彩感覚の問題であり、致し方ないものかも知れません。

さて、いよいよ着色作業です。複雑な色を出すため数多くの絵の具（リキテックス）を混ぜ合わせます。最初から濃い色を塗ると後で薄くならないので、初めに明るい色を塗り、土器の色を見ながら一色、一色を加えながら色を作り、段々と近い色に仕上げていきます。土器の表面の質感を出すため、スポンジを使用したり、表面が光らないようにするため、つや消し剤（マットメディウム）を交ぜたりもします。時々は全体の色を見るため、遠くから見るようにしています。弥生時代、古墳時代に実際に使用していた土器の「当時の色」はどんな色だったんだろう。発掘調査で出土した「今の色」と同じだったんだろうか。2.000年も1.500年も土中に眠っていたんだから多少は変化してるのかなぁ。こんな色をだそうと思って作ったのかなぁ。素朴な疑問がわいてくる。

土器の色は多少なりとも絵に携わった自分に新たな色彩感覚をもたらせてくれた。